

フィリピンへ渡った日本人

——マニラの大名像から

読み解く日比関係——

山下 恵理

マニラにある数多くのモニュメントのなかでも、パコ駅前の高山右近像は独特の存在感を放っている。人気もまばらな国鉄駅の前に、なぜキリシタン大名の像が立てられたのか。その背景には、フィリピンへ渡った日本人移民たちの長い歴史がある。

右近像があるパコ市ディラウ地区は、タガログ語で「黄色」を意味し、スペイン人が住んでいた城壁の外に作られた日本人居住区に由来する。右近がキリスト教迫害を逃れてフィリピンに渡航した1600年代、すでに300名以上の日本人がマニラに住んでいたとされている。本稿ではフィリピンへの日本人移民に焦点を当て、日比関係史を知るための基本文献を紹介したい。

佐藤虎男著『フィリピンと日本：交流500年の軌跡』（サイマル出版会、1994年）は、500年にわたる日比交流史をコンパクトかつ体系的にまとめたものである。前半部では、安土桃山時代から戦前にかけてフィリピンに東南アジア最大の在留邦人社会が出現するまでの経緯を説明し、後半部では戦争によって壊滅的打撃を受けた日比関係とその修復について述べている。

長きにわたる日比交流史のなかで、最も多くの日系移民がフィリピンへと渡ったのは、明治初期のことだ。近代化の恩恵を被ることができず生活基盤を失った農民や漁民は、高収入を期待して海外へ移民した。フィリピンで日系移民が携わった大事業の1つがベンゲット道路（別称ケノン道路）建設である。ベンゲット道路は、ルソン島中部パンパンガ州の北端からベンゲット州バギオ市へ急峻な山並みを貫く約41キロの道で、1898年にマニラに総督府を置いた米国が着工し、多くの海外労働者の犠牲を払いつつ1905年に完成した。早瀬晋三著『「ベンゲット移民」の虚像と実像：近代日本・東南アジア関係史の一考察』（同文館出版、1989年）は、日米両国の公文書を駆使してベンゲット移民の実像を明らかにした研究書である。本書の白眉は、ベンゲット移民に関する叙述にとどまらず「ベンゲッ

ト道路は日本人移民の優れた技術と献身によって完成された」という言説の成立過程をふりかえり、日本人の意識に浸透した東南アジアに対する優越感の根本に迫ろうとした点である。

ベンゲット道路建設とともに多くの日本人移民の受け皿となったのがマニラ麻産業だ。近年、ドゥテルテ大統領の支持基盤として知られることとなったダバオ市だが、1900年前後にはすでに軍需産業としての側面をもつマニラ麻栽培で隆盛を極め、数多くの日系移民が住んでいた。柴田善雅著『ダヴァオにおける日系マニラ麻栽培業の勃興と1920年代の再編』（『東洋研究』2004年 151号、1～49ページ）は、ダバオのマニラ麻栽培に関し、1920年代末までの通史的考察を行った論文である。一次資料に基づいた資金調達、投資、生産、労務の詳細な記述を通し、マニラ麻産業に関わった日系企業の全体像を明らかにしている。これに対し、天野洋一著『ダバオ国の末裔たち：フィリピン日系棄民』（風媒社、1990年）は、マニラ麻産業の過酷な労働状況を明らかにしたものである。このほかダバオ在留邦人の戦争協力問題については、池端雪浦編著『日本占領下のフィリピン』（岩波書店、1996年）に収録された早瀬晋三著『「ダバオ国」の在留邦人」も参照されたい。

移民送出後の日本に焦点を当てたものとしては、武田尚子著『マニラへ渡った瀬戸内漁民：移民送出母村の変容』（御茶の水書房、2002年）がある。本書は、明治期から昭和戦前期の40数年間にわたって、マニラへ漁業移民を送出した広島県田島の社会構造の変容過程を実証的に分析している。

海外送金額が国内総生産の1割を占め、海外労働が経済の屋台骨を支えているフィリピンは、今後グローバルな人的移動の事例をみるうえで看過することができない国家である。しかし、歴史をさかのぼれば、いかに多くの日本人がフィリピンへと出稼ぎに行ったかがわかる。こうした1世紀を隔てた日比労働力移動の著しいコントラストは、グローバル社会におけるアジア移民を理解するうえで、多くの示唆を含んでいる。

冒頭の右近像の除幕式が行われた1978年1月から、今年で40年が経過した。次の1世紀に右近像はどのような人々の、どのような移動の形をみることになるのだろうか。

（やました えり／アジア経済研究所 図書館）